名古屋のアーティストのキャリア構築に関するインタビュー調査

【インタビューデータ版（音楽編）】

１　職業としての音楽家になるまで

１）高校から音楽大学へのルート選択

今回、インタビューした対象者のうち、音楽家９人は全員、音楽大学出身であった。大学へのルートは高校の音楽科より普通科の方が多いが、双方幼い頃から楽器演奏を習っている。音楽大学への進学は自身の意志であり、加えて親が音楽関係者であるなど自然に音楽に親しむ家庭環境にあり、家族も対象者が音楽を続けて音楽大学に進学するのをあと押ししている様子がうかがえた。

「親がヴァイオリンの先生だったので、気付いたらやってました。漠然と自分はヴァイオリニストになるんだって。高校の音楽科に入る時点で、音大に行くっていうところまでは、約束だよ、みたいな感じで、うちの親は」（30 代女性）

一方普通科からは、管楽器や打楽器では中学や高校の吹奏楽部で演奏活動を始めて音楽大学に進学する者、また作曲科では普通大学も含む選択肢のひとつとして進学する者もいるという。

「やっぱり吹奏楽やってる子が多いです。名電とか安城学園とか。吹奏楽ってコンクールがすごく激しいので、毎日の生活の大部分を楽器に懸けてるっていう生活を送ってきて、そのままやっぱりそれを究めたいって思って音大に進む子が多分多いんじゃないかな」（50 代女性）

２）名古屋圏外への移動

名古屋圏出身で首都圏の大学に進学する者の動機としては、全国規模で進学機会をとらえ、レベルが高く機会や活動の場も幅広い環境に身をおきたいという期待がある。とくに高校の音楽科出身者は、名古屋圏の高校であっても、東京藝術大学を頂点とする大学の序列で進学先を選択している。才能があって東京藝術大学に合格する実力がある学生が地元の音楽大学を選択するという志向はないという。また、地元の大学に進学したのち、首都圏の音楽大学の大学院に進むというルートも一般的である。

「率直な印象だと、高校の音楽科に行ってる子たちは東京に出ます。いろいろ頑張ってます。帰ってきたくないなって、私の知り合いの子たちは言ってます」（30 代女性）
「（学部の）卒業生も、やっぱり大学院から東京藝大だとか、そういうのもいます。チャンスがあるからっていうのはあるんでしょうね」（40 代男性）

技術だけでなく文化全般を見聞し表現の幅を広げていくため、クラシック音楽の源流であるヨーロッパをはじめとする海外への留学も多い。東京、あるいは留学で名古屋圏を離れて帰ってきた者が、名古屋圏の主要な音楽家として活動している事例も多い。

「もっと先を勉強したいってなると海外に行くパターンが多くて、（地元で）博士号とか院があるよっていっても、学べる量が違う、質も違うっていうのがあって、そうなってくると海外に求めてしまう」（40 代女性）

３）音楽家として生きる

音楽大学を出ても全員が音楽家あるいは音楽関係の職業に就くわけではないなか、対象者たちはどのような過程を経て現在にいたったのだろうか。職業としての音楽家を目指す動機としては、演奏技術の卓越性の自認であり、その根拠としては、上位の音楽大学にいること、大学内で成績優秀者であること、学内外でのコンテストで上位に入ることなどがあげられた。

「プロになろうと思ったのは多分、小学校 5〜6 年生の時から思ってました。（大学の同級生は）意外と迷ってない子のほうが多かったかもしれない。音楽家になって当たり前って思ってる子のほうが多かった気がします」（30 代女性）
「卒業した時はやっぱり『演奏家になるのが一番』というふうに刷り込まれてたところがあったんです。オーディションで、ほんとにもう点数で成績で出されて上位の人はコンサートに出られる」（40 代女性）

このように、音楽家となることが当然である、あるいは就職をするという発想がない環境であるために、大学生の時点では具体的なキャリアパスまで思いいたっていない様子もうかがえる。

「大学出るまでぐらいまでは、もう大学に通うっていうことで必死で、具体的に卒業してどういうキャリアを積むかとかまでは、本当に漠然と、どっかにオケに入るのかなとか。活躍されてる先輩とかもいるし、特に考えてなかった」（30 代女性）

「時代とか世代もあるような気がする。自分の大学生の時とか、いわゆるロスジェネで就職どうするとかっていう部分の思考の回路がもうなかった。『絶対に音楽やるんだ』っていうわけでもなく」（40 代男性）

音楽家としての活動は、生計をたてていく活動と自身の表現の成果を発表する活動に分けられる。生計については、一番安定的なのは、オーケストラに所属する、あるいは大学の教職に就くことである。フリーランスの場合は依頼演奏の受託、オーケストラのエキストラ、伴奏、自身で公演企画をする、ライブハウスに出演する、講師で教えるなどの仕事をこなしていくことになる。

「自分の表現の欲望も満たせて、それがある程度仕事になるっていうものが、効率がいいかなと思っているので。自分はオーケストラの活動が、今のところ当てはまる」（30 代女性）
「大学院生の時ぐらいに宗次ホールのランチタイムコンサートに出るようになって。いっぱしのプロの音楽家として見られるようになってきて、それからそのプロデューサーの企画にいっぱい出て結構いろんな所で知ってもらえるようになって」（30 代女性）
「打楽器は活動しやすいのかな。パーカッションって結構呼ばれるんです。他の楽器にちょっとパーカッション入れてほしいみたいな感じ」（50 代女性）
「どうやって食べてくんだろうって考えた時に、公演依頼してもらうっていうのは分かりやすく目標になったところでもあります」（30 代女性）
「日本って、多分全体的にですけど、フリーランスはまず難しくて、やっぱりどこか就職する、またはうまくいけば先生になれるとかっていう方向しかなかったんですよね」（40 代女性）

一方、自身の表現も尊重しながら生計の活動を模索し、自分なりのスタイルを確立するまでには卒業してから数年など一定の期間がかかっている。

「もう大丈夫だなと思ったのは、卒業してから3～4年たった頃ぐらいから。そんなに苦労しなくてもお客さんも呼べるかなと思って、コンサートを開催できるようになりました」（30代女性）
「（自分で仕事を選びはじめたのは）26、27 歳ぐらいですかね。何でもかんでもやって、悩んで、もう二度とやるか、みたいなやつをやってたのは、25 歳ぐらいまでですね」（30 代女性）
「最初のうちは、声をかけてもらえば『何でもやらしていただきます』っていうふうに言っていたんですけど、自分が何がやりたいか分からなくなってしまって。私じゃないとできない仕事以外は断ろうと。オーケストラとか吹奏楽のエキストラの仕事とか、行けばお

金もらえるんですけど、ちょっとやめて。30 歳ぐらいですね」（40 代女性）

４）音楽家以外のキャリア選択

対象者にはいなかったが、音楽大学を出て音楽家以外の職業に就く選択もある。音楽大学の中では演奏家は演奏家になることが目標とされる一方、技術が序列化され、学生自身が諦めて方向転換していく。

「選ばれない人はやっぱり選ばれない。もうそういう人たちは、自分はコンサートはできないから、違う方向に行ったほうがいいんだみたいな感じ。もっといろんな役割がたくさんあるのに、何だか演奏家にならないといけないような育て方をやっぱり音楽大学ではされるので」（40 代女性）

一方、多くがフリーランスとして活動するという職業としての不安定さなどから、一般企業に就職する学生も一定数存在する。今回のインタビューの中では、とくに私立大学や作曲科などではその傾向は強く、従来よりも音楽大学卒業後、音楽関係以外の就業の選択肢が増えている傾向がうかがえる

「いわゆる完全に一般企業に就職したり。今、下手すると 1 年生の後期あたり、例えば 10 月、11 月で、音楽は 4 年間で打ち切りって宣言してる学生いるんです。実はそんなに珍しくなくて何人も」（50 代男性）
「（メディア系の専攻で）最近はアーティストになる人がとても少ないって聞きました。多分、アート以外で、テクノロジー使って、社会にいろいろアプローチしていく方法がいっぱいあるからですかね」（50 代女性）

また、音楽家として活動しはじめても、生計のための仕事に時間を取られたり、フリーランスの仕事の不確実さから、活動を断念していくケースもある。

「講師を続けていると学校のことになるので、そうすると練習できなくなるし、楽器から離れちゃうっていう子が多くて」（40代女性）
「実家の支えが強い人たちはいいし、自活しなきゃいけない人たちっていうのは（正社員などの）職を諦めて、最初はコールセンターで、夜は教室でとか、オーケストラのエキストラみたいなことを30代のうちはやってたけど、先が見えなくてほんとに普通の一般企業に転職をとか、そういう人もいる」（40代女性）

女性の中には結婚、出産等で音楽家のキャリアを中断せざるを得ないケースもあるが、

その後活動を再開した際にその経験が役立ったという声もあった。

「私、両親も音楽やってたのでもう音楽家ばっかりだったんです、周りが。で、すっぱり辞めて子どもたちのママ友とか全然また違う友達ができて、一般感覚というかそういうのも経験したのはすごい良かった。（公演を企画するときに）自己満足だけみたいなレパートリーじゃなく、一般の音楽にあんまり関わってない人って活字で見て『知ってる、この曲』っていうのがあると行きたいと思うみたいで、そういう曲も入れようかなとか」（50代女性）

２　キャリア構築の戦略

１）演奏家・アーティストとしての生き残り戦略

毎年音楽大学から卒業生が輩出されていく中、音楽家として生きていくためには、公演の依頼元、観客などにアピールしなければならない。演奏家としてのスキルアップだけでなく、自分にしかないオリジナリティの模索、観客にあわせた演奏スタイルの獲得、表現の場の多様化、他分野との横断などを戦略としてとっている。

他の音楽家との差別化を図るために、映像など他分野とのコラボレーションなどオリジナリティのある演奏企画で依頼公演の獲得を狙ったり、ファミリー向けコンサートの企画を続けたり、音楽ホールだけではない様々な場所での演奏経験を生かしている者もいる。また様々なシチュエーションで演奏できる楽器の特性を生かして活動の場を広げているケースもある。

「何かリクエスト来たら、その場でぱっと弾けるようなスキルを身に付けたりとか。最初はちょっと変なプライドもやっぱりあって『なんかなあ』とか思ってましたけど。でも、別に音楽ってそんなに区切らなくていいって思うようになってきて、レパートリーは増えましたね」（30代女性）

「私が活動し始めた頃に、カホンが外国から入ってきて。打楽器って楽器を運ぶのと組み立てるのが大変なんですけど、それを箱ひとつで身軽に行けるようになって、気軽にアンサンブルに入っていける。クラシックだけじゃなくて、ポップスでもジャズでもどんなところでもできるよっていうことをやってる人はほとんどいなくって、名古屋には特に少なかったですし。女性でっていうところで、それは付加価値でした、自分にとっても」（40代女性）

「社会と共存する芸術活動をどうやってできるかっていうところと、あとはフリーランスでも活動ができる場所をうまくつくれたらいいなっていうのを、名古屋での活動は目指していて。地域の人たちに外で見てもらって、何か、じゃあ今度のコンサートホールに行きたいなっていうきっかけになるような」（40代女性）

また、公演はアンサンブルで行うことが多いため、固定あるいは断続的にグループを組んだり、活動することで依頼公演を獲得するほか、活動継続のモチベーションになったり、互いの得意・不得意分野の補完になっていることも見受けられた。

「1人でやっていたら続けられてなかったかもしれない。在学中から声かけてもらった先輩方とグループを2つやってたので、そこでコンサートだったり、何とかやめずに続けてきた。企画して自分で動くっていってもできないことばっかりなんですね。だからやれないことは全部お願いしてます」（40代女性）
「ユニットとしてネタをお持ちでという人たちは、幾つかはあるかと思います。割と女性中心な感じがしますよね」（40代女性）

個人や小規模グループで、公演の全体構成やMCなども含んで依頼されるケースも多い。安定的に依頼公演を獲得している音楽家は、公演全体としての質のレベルアップ、観客やクライアントの満足度を上げるために、公演ごとに振り返りを重ねながら運営のノウハウの改善を行っている。

「例えばパーティー演奏は弾けるだけじゃ駄目で、目上の方とのおつきあいの仕方が分かってて、MCも中だるみしないようにできたりとか。私も人の演奏会に行くのが大好きですが、こういう言い方をしたら、みんながうなずいたりとかするんだっていう、客席の雰囲気を知るっていう意味でも行ってるんです」（30代女性）
「コンサートの中でMCをしたり構成していくということを、依頼公演でもすることが多くなってきました。お客さんへのアンケートをとったり、しゃべりや曲の流れもこういうふうに持っていったほうがお客さんの反応が良かったなとかっていう、とにかく毎回すごくよく見るようにしてます」（40代女性）

２）ネットワークを築く

名古屋圏には音楽事務所がほとんどないなか、公演依頼をはじめ、オーケストラのエキストラ、講師などはほぼ、大学関連をはじめとする人脈、ネットワークなど個人のつながりから依頼されることが多い。

「自分の先生がもともとオケに入ってて、その人が引っ張ってきて、それでオケの中で認知度があった時にオーディションにあいつを呼べみたいな話になってみたいな感じになるんですね。いろんな人とコネクションができたら呼んでもらえるようになって、ちょっと出てくれないかみたいな。話がつながっていくと、生活が成り立っていくということなん

じゃないかなと思います」（50代女性）

それ故に、依頼があった際にはきちんとした演奏をして信頼を得、それが次の仕事につながるという意識は皆もっている。そのためにはコミュニケーション能力も求められる。

「ピアノの子だと、ちゃんとコミュニケーションがうまくいって、一緒にやる仲間がいるなっていう人は、割と仕事をしっかりとやってるなっていうのはあります」（30代女性）

アウトリーチ的な活動をする機会に、通常の公演とは違う客層と出会い、そこでのネットワークを活かして活動範囲を拡げているケースもある。

「小学校や中学校、保育園、幼稚園などに演奏、芸術鑑賞会っていう形で行ってますが、最初は大学の同級生が学校の先生になって呼んでもらうことが多かったけど、今はつながりからなんですけど、例えば市が企画してアウトリーチ公演を行うので、域内の全小学校に演奏行ってくださいっていうふうに市から依頼されて行ったりするように」（40代女性）
「接待のないクラブみたいなところで弾いてたんですよね。そういう所で企業の経営者の方々とお知り合いになれて、いろんなパーティーにも呼ばれるようになりました。（自主公演にも）その会社の人たちが来てくださったりとか」（30代女性）

一方、さまざまな組織とのネットワークを獲得するために、公募事業に応募するなどの行動をとり、活動を拡げている者もいる。

「つながりが持てないと、やっぱり仕事はなくて。（名古屋市文化振興事業団の）ぶんしんパートナーシップは応募して、採用してもらって、そこで相談ができたりとか、実際に公演をやらせていただいてすごく大きかったと思います。事業団からお仕事をいただくことも増えました」（30代女性）

３）自主公演、依頼公演、教職のバランス

音楽家の活動は、自主公演、依頼公演、オーケストラの常勤やエキストラ、伴奏、教職や講師などだが、そのバランスはさまざまである。収入を得るためにはノルマのない依頼公演を多く受けたり、また大学の教職や教室、講師を務める者も多い。自身の専門とは異なる分野での仕事も受ける場合もある。しかし、音楽家として自身の表現活動の追究、演奏技術を高めるための演奏活動は、しばしば自主公演となり時間的・経済的なやりくりや集客の苦労はあるが、取り組んでいかなければならないという意識は共通する。

「両立してる人が多いかな、教えつつ、演奏もしつつって。例えば、オーケストラとか入っちゃうと、あんまり生徒さんは取れなくなってしまったりもしますし。逆に教えるお仕事で確実に生活を築いていきたいってなると、演奏の場所はあんまり受ける間がなくなってしまうっていうことはある。管楽器になると、いろんな吹奏楽が学校にあるので、そういう指導だったりとか、アマチュアオーケストラの指導とかも、もちろん弦もですけど、管も行くっていう感じにはなりますね。ピアノだと、自宅か教室で教えてる人がすごく多いし、あとはコンクールの伴奏とか、自分が表に出るんじゃなくて、支えるほうの活動みたいな方とかも多い」（40代女性）
「作曲家の子がいて、しばらく名古屋にいた時には、ピアノを弾いたりとか伴奏したりとか、言われた音楽系の仕事をとにかくやるみたいな。（後に）自分の即興演奏とかもやるようになって、いろんな人とセッションするみたいなことを主軸にやってました」（50代女性）
「（公演は）1カ月、10～20ぐらいやってる。依頼がほぼで、自分で企画する有料公演は1年に3回。学校公演は学校公演でほんとに楽しいです。でもやっぱりホールのほうが自分がやりたいこと、好きなことできるし、全面での表現ができる」（40代女性）
「一番多いのが自主企画のライブ活動。企業様からのパーティー演奏の依頼も結構多い。自分の今のキャパに応じて生徒が20人ぐらいで、ライブ活動も無理なく今はできています」（30代女性）
「オーケストラの活動が半分以上、2割、3割ぐらいが、レッスンや教える仕事、余った時間で、自分の自主企画コンサート、1年に1回ぐらいです」（30代女性）

大学教員の場合は、一定時間を拘束され、残りの時間で自身の表現活動を行うことになる。繁忙になってきつい、あるいは時間をとられるために活動を断念するケースもあるが、教職であってもアーティスト活動を行うことが自身の存在意義であるいと認識している。

「学校の先生だけやってれば楽です。企画とかアーティスト活動をし始めちゃうと、いっぱいいっぱいになっていきます。だけどちゃんと活動続けていないと、音楽科の先生として示しつかないというか。アーティストなわけだから、全員、先生たちも」（40代男性）
「（大学教員は）良い面、悪い面、二通り。例えば個人では購入できないような100万円単位の機材とかを使用して実験的なことができるし、人脈が一気に広がる。一番きつかったのは、海外からいいオファーを受けても行けないこと。でもトータルで見たら良い面のほうが多い」（50代男性）

４）支援や助成の活用

自治体のアーティスト支援がキャリアアップとなったという声もいくつか聞かれた。若手音楽家向けの公募プログラムに採用されたり、レジデンス・アーティストに選ばれたり、スタジオの低価格利用などが挙げられた。

「20歳のとき愛知県芸術文化センターでサウンドパフォーマンス道場があったんですよ。それにノミネートしてもらった。自信につながったし、続けてもいいのかもなって思える何か材料にはなった」（40代男性）
「長久手文化の家は本当にあの規模にしてはすごい頑張ってる。創造スタッフという若手アーティスト支援の制度は素晴らしい」（40代男性）
「横浜市の文化財団はなかなか強力じゃないですか。ほんといろいろお世話になりました。その時はZAIMっていう財務省の建物なんだろうな、そこをリノベーションして中の部屋をいろんなアーティストたちに貸し出すみたいな事業をやってて、格安でした」（40代男性）

しかし、自治体の賞や助成やプロジェクトが若手にはマッチしなかったり、その後のキャリアにはつながらないという声も聞かれた。愛知県芸術文化選奨、名古屋市芸術賞もある程度評価が確立された音楽家が授賞しており、若手支援となると見当たらないという声があった。

「（賞も助成も）あんまりない。自分とプロデューサーに引っ張ってもらったみたいな、本当そんな感じです」（30代女性）
「国際芸術祭あいちに出てその後何かあるかなと思ったけど本当になく、名古屋市文化振興事業団も芸術祭に参加したくらいで他はない」（40代女性）
「国際芸術祭の中でもパフォーミングアーツやってますけれども、やっぱりごく一部だし、その中で若い人たちを入れるっていうのは、なかなかできていない」（50代女性）

民間の人材育成プロジェクトや助成もステップアップの機会にはなっている。奨学金とセントラル愛知との共演がセットになっている山田貞夫音楽財団の音楽賞や、名古屋演奏家育成塾、スター・クラシックス・アカデミアなどの名前が挙げられた。

その一方で、注目度が高いフェスティバルなどの実施の方がキャリアアップ効果は高いのではという声もあった。国際芸術祭あいちが美術では若手育成、人材育成にもなっているが、音楽には地元の若手音楽家も参加できる大規模イベントがないため、そのようなフェスティバルを期待する声も聞かれた。

３　マネジメントの重要性

１）セルフマネジメント力と戦略

フリーランスの音楽家は、自身のキャリアアップ・ブランド力向上、仕事のためのプロモーション、各種調整、活動に伴う事務作業を含む諸業務などマネジメント全般を音楽家自身が行うケースが多いが、演奏技術に加えて、セルフマネジメントの能力と積極性がある者に仕事の依頼が来るというのは、ある意味当然のように捉えられている。

「自分のプロデュースは自分しかできないから」（30代女性）
「（求められるのは）音楽家たちが自分たちで持続していく気概と気合い。プロデューサーがいて、声が掛かってチャンスが降ってくるっていうふうに思ってる音楽家は多分もう無理ですよ、これからは」（40代男性）

セルフマネジメント力を身に着けるためには、各自それぞれの問題意識から戦略をたてて工夫を凝らしている。スキルを身につけるため公演企画の仕事に就いたり、仕事を受ける際に相手の状況を見ながら着実にマネタイズする工夫なども行なっている。

「演奏で食べてくためにはつながりが要るなと思って、公演を企画する団体に就職しました。どうやってその仕事が名古屋で回ってるのか、中から知ってみようと思って」（30代女性）
「公演が終わると『うちの保育園にも来てくれない？』ってなるんですよ。最初はめちゃめちゃ安い価格とかで言われちゃって。ただ、ボランティアはしないようにずっと気をつけてました。『この値段なら、今日の人数は行けないけど、2人だけなら』とかっていうふうに何とかして。でも絶対手は抜かない。それで何とか次々つながるように、とにかく楽しんでほしいし、お金だけじゃなくてやってほしいなと」（40代女性）

２）広報や集客の課題

インタビュー対象者が一様に一番の課題と口にしていたのは集客や広報である。集客についてはそれぞれ自身の集客力は把握しており、それに合わせた規模の活動の設定とするなどの工夫を行なうほか、現状では少ない、あるいは拡がりに欠けると考えている者はそれをさらに押し上げたいと思っている。価格設定と集客のバランスについての悩みも聞かれた。

「東京に対して名古屋は大体10分の1っていわれます。東京で500人の室内楽公演を同じアーティストが名古屋でやっても50人になりますよね」（40代男性）
「（現代音楽は）5、60人って感じじゃないですか、必ず来るコアなファンは。他の分

野、例えば文学と朗読と合わせた企画で100人近く来ると、今日はたくさんだねみたいな感じ」（50代女性）
「（飲食のあるライブは）こっちから来てくださいって言わなくても『行きます、行きます』って、来てくださる方はそんな感じです。20人いたら、ほぼ満席です。クラシックコンサートってなると、また違う層になってきて。30～40人ぐらいは、ぱっと生徒さんとか来てくれるようになりましたね。（ターゲットを）一緒にしたかったんですけど、やっぱり好みがあるので。お声がけを私からする時も結構分けてます。身近に感じてもらうっていうことで、わざと狭い箱にしたりとか、戦略的にやったりとかはしています」（30代女性）
「自主事業は、頑張って100人で入場料3,000円とか4,000円とかって設定せざるを得ないです。依頼公演で1,000円以下のものはとてもお客さんの入りが良くて。依頼公演でも2,000円だと、入る時もあるんですけど、入らない時もあって。ああ、1,000円の壁っていつも心の中で思ってます」（30代女性）
「自主公演っていうのはちょっと赤字ぐらいの、自分たちがやりたくて、聞いていただきたい人に来てもらうっていうので。以前の公演が70人ぐらいだったので、100人前後のホールのキャパシティを全部使えるようにするっていうのが、今のところの目標です」（30代女性）

集客力を上げるために、生徒など出演者を多くしてその関係者で動員するという従来ながらの方法も見受けられるが、今日ではSNSでの情報発信を活用することが語られ、実際に成果を上げられているケースもある。

「わりと入るイメージがある他のグループは、結構ちゃんと工夫されてて。若い子、学生とか卒業したばっかりの子たちとかも出演させたり」（30代女性）
「（教室の生徒の募集は）今のお母さま方はインスタで演奏動画とかを見て。ホームページよりはインスタのほうが動いてますね、私の場合は」（30代女性）
「みんなYouTube、TikTok、全部SNSを駆使していろんなのを発信してて、本当それはすごいなって思う。新しいツールにも対応していかなきゃなとは思いつつ、なかなかやれてないんですけど。今、若い子たちは本当にそういうの上手だなと思います」（30代女性）

３）マネジメントやサポート機能の不足や困難

セルフマネジメントの必要性は認識しているが、表現者としての音楽家が本業である以上、フリーランスの音楽家たちは他にマネジメントやプロデュースに携わる人材がいてくれたらという願望はもっている。しかし名古屋圏にはフリーランスの音楽家をサポートするマネジメント機能、音楽事務所、プロダクションが不足している。

「個人でマネジメントをしている方はいるけど、全部アーティストを引き受けて、全ての交渉とかをしてるところはたぶんないですよね。資源がないんじゃないですか。やる場所と、登録してそこまで活動できるアーティストがいない」（40代女性）
「コンサートを開きたい人っていうのは意外といるんですけど、誰に頼んでいいか分からないので、いつも同じような人に頼んでる。大体の場合は、演奏に対するお金はあるけど、調整というかプロデュースっていうか、企画、構成みたいなものに対してはあまりお金を払おうという人がいない。それも大きいかもしれません。特に言われるのはMCですよね。お話が苦手っていう演奏家がいまだに多いので。そこの間のコーディネートする人ほんとにいない」（40代男性）
「やることがもう多過ぎて、場所も自分で交渉してください、じゃあこの場所ってなると、地域との関係性をつくんなきゃいけない。（海外では）そこがちゃんと整備されてて。お金を出すところ、地域と場所があって、アート、アーティストみたいな、そこをつなぐ人がいるよっていう」（40代女性）

オーケストラや音楽大学が複数あるため、公演依頼側からみればそれらが企画組織、プロダクションとして機能し、需要を満たしているという面もあるが、アウトリーチなどの教育普及活動などには専門性が不足しているのではという声も聞かれた。

「名フィルのメンバーが室内楽公演に行くなら、名フィルにお願いがきて、仲介に入って、契約書を結んで、手配するのでそこはマネジメント料っていうのが、もちろん付きますよね」（40代女性）
「名古屋でじゃあ教育的な、幼稚園や保育園や学校にアーティストが演奏に行くってなった時に、誰がそこに行ってますかっていう、そうすると、結局オーケストラのメンバーだったり。コミュニティ向けのコンサートとかアウトリーチとかを頼むと、もともとそういうことを突っ込んでやってない人が、（音楽大学の）学生だったら今取り組んでいる課題曲を保育園児の前でやっちゃったりする」（40代男性）

マネジメントを音楽家自身がすることの問題は、調整や事務作業に時間を割かれることの他、個人で直接依頼を受ける場合に音楽家からは出演料など諸条件の交渉がしにくい、クライアント側からは負のフィードバックを言いにくいという面があり、演奏環境の向上や公演のレベルアップにつながらないことがある。

「出演料の交渉は自分ではしにくいんじゃないですか。なにかあった時に契約不履行でも、そういう契約書って自分たち全然書けないし、誰も知らないので。出演料も交渉したら交渉した分、ちゃんと責任持ってお仕事できるんじゃないかなとは思う。でも、みんながユニオンとか入ってるわけでもないから、言い値になってしまって」（40代女性）

「本番になって、クライアントさんから『今日はほんとに良かったです。ありがとうございました』で終わるんですよ。でも、どんなに素敵な演奏の本番であっても、何か1つや2つは『これ、次に向けて直したほうがいいよね』ってことは絶対あるんだけど、それは言われない。それ言ってくれる人って誰？っていったら、その間に誰かいないと」（40代男性）

一方、音楽家としては、事務所があったとしても、費用や活動の自由度の点からマネジメントを外注したり、事務所に所属するのを躊躇する面もある。

「マネジメントを外注できたらどんなに楽かと思いますけど、一番ネックになるのは費用。音楽事務所は正直ここなら安心してって思えるところが名古屋にはない」（30代女性）
「専属契約しちゃうと、それ以外で声がかかった時に受けられない。声かけられたらやっぱり応えたいっていう気持ちが、お金じゃなくてというところもあるので。（謝礼から事務所の取り分があり）『そんなに持っていくのか』ってなったり」（40代女性）

一方、プロデュース機能・人材が少ないことにより、様々な領域の様々な人々をつないで新しい表現を作り出していこうという動きが生まれにくく、名古屋圏の芸術表現の拡がりにつながらないということも指摘された。

「そういうことをつなげてプロデュースする人、というのはやっぱり思い浮かばないです。誰かと誰かをあれして新しいものを作るという発想はあまり見受けられない。今年もやりました、素晴らしかったですって終わりっていうようなことが多い。新しくなじみのない人たちと接点をつくって広げていこうというのがあまりないので、そこが本当に問題だと思っていますね。」（40代男性）
「『もっとこういうことをやったらどうなの』って提案する人がいないっていうことだと。プロデューサーが絶対に欠けてるとは思います」（40代男性）

４）マネジメント教育の不足

このように、音楽家になれば必要になるセルフマネジメント力、あるいはマネジメントに関する知識については、音楽大学では教育されていないことも多く、社会に出て公演を自身で企画するなかで、OJTで身に着けている。

「コンサートにやるってなった時にどこにどういうお金がかかるかっていうことを全く知らなくて。『ホール代かかるよね』『チラシ作るのかかるよね』とか、やってくと、『受

付に人が要るんだ』とか、『自分たちだけじゃなくて照明とかもお金が要るんだ』とか、そういう部分も困りました」（40代女性）

大学在学中は演奏技術の向上が第一義とされるため、マネジメントまで考えが及ばず、勉強しようというモチベーションももちにくい。しかし、将来仕事に就いたときに必要であるということの他に、世の中の動きや社会環境に興味を持つきっかけになるという点も含めて、大学在学中でも教育やOJTで学生に伝えるべきという声が多数であった。

「集客が一番大変ってみんなは言ってるんだけれども、それをどうしていったらいいかを教える人がまずいないじゃないですか。（大学などでの教育は）全くなくて。そういう学科をつくってもいいんじゃないかって思うぐらい」（30代女性）
「私立の音大だと大学内で、マーケティングの授業とかがあるって聞いたことはあるんですけど。やっぱりそういう仕事の仕方みたいなのを学ぶ機会がすごく少ない」（30代女性）
「マーケティングだとかっていう人たちとの交流とかがあれば、じゃあ今、例えば世の中に何が必要とされているのかとか、自分が何ができるかって考えるきっかけにもなる。社会に出た時に、彼らにとっては選択肢が広がるってのは感じます」（40代女性）
「それを教育として教えたら画一化されて、それがもう途端にその場で無効になりますよね。だって、どれだけ人と違うかだから。でも、そういうマインドをこっちがやってみせるとか、何かお手本見せるだとか、何か巻き込むとか、そういうのはある種教育にはなるかもしれない。技能や知識の伝達としてそれをやっても、なかなかっていう思いは結構あるので、自分は自分の企画に学生を割と巻き込みました」（40代男性）

４　音楽業界への問題意識

１）高校・大学でのキャリア教育および卒業後の支援の課題

高校の音楽科や音楽大学で、ひたすら演奏技術や表現活動の向上を目指す環境から社会に出たときの認識のギャップから、学生時代から幅広いキャリア感を身に着けることの必要性も多く語られた。

「本当に優秀な方は、世界的にコンクールとかで受賞して、活躍して。でも、そういう人って本当に1,000人に1人とか、ひと握り。そうでない人たちが何となく音大入って、卒業したら路頭に迷うみたいなことがなるべくないように。自分の本当にやりたい音楽を表現する場と、それが仕事になるっていうことはまれで、それとは別に生きていくための仕事っていうのが必要な場合もある、やっぱり、それがごっちゃになる。自分はやりたいことを仕事にしようと思ってたのにできないっていって、そこで諦めちゃう。でも自分にこう

いうことはできるから、こういうことを仕事にしようとか、探すこともできるんだよっていうのもあったほうが、選択肢を提示したり」（30代女性）
「私はもう演奏家になるぞって思ってたからあんまり周りが見えてなかったかもしれないですけど、他にもっとこういうこともある、こういうこともあるっていう選択肢があるっていうことは知っておけたら良かったなと思います」（40代女性）

大学卒業後の研さんがあまりなされず、たとえば演奏技能向上だけでなく、社会の中での文化芸術活動の意義づけを、音楽家自身がもっと認識すべきだということも指摘された。

「出て終わりでもないので、学校は。どのぐらい自己研さんを積んでいって、自分たちが発してることが一体何なのかってことも分からずに演奏しちゃう人ってすごく多くて。依頼が多いじゃないですか、最初は。譜面が送られてきて、弾いて、終わりっていくことばっかりだから、どこに向かってるかってあんまり意識せずにやる人が多い。本人たちが社会の歯車の中の担い手としての意識が、ちょっと足りないっていうのを私はいつも思っています」（40代女性）

しかしながら、音楽大学あるいは高校の音楽科等においては教授陣自身が音楽家であり、音楽家になる以外のキャリアプランは語られにくい傾向にあるため、それに対する問題意識も聞かれた。

「学校の先生たちが、自分は勝者だってことをよくわきまえてもらって、自分たちみたいに頑張れば君たちもできるってそういうことを言うんじゃなくて。どうなりたいのか、何がしたいのか、出た先にはどういう世界があって、君はどういうふうに社会と関わっていきたいのかってことを、ちゃんと問うようにしていただけると」（40代女性）
「（自分は）それまではフリーランスだったけど、先生になって。音楽の世界がかなり厳しいのを分かってるのに、キャリアのことだとか音楽家が卒業後どうやってサバイバルしていくのかっていうことを何も話さずに、さもうまくいってきた人のように先生は振る舞わさせられるし、そう見えるじゃないですか。だけど、早いうちにこういう真実というか、ちゃんと裏にあるいろんなことはちゃんとあるっていうことをちゃんと自分から話さなきゃなとは思ってたんですけれども」（40代男性）

音楽大学でも最近は私立を中心にキャリア支援センターが設置されており、サポートが行われているが、フリーランスで活動する現実について語られる場やロールモデルの必要性も語られた。

「本当にみんなめっちゃ困ってて、自分が音楽で食べていける気がしない子ばっかりなんですよね。夢ないじゃんって。今の未来ある子たちが、未来に、音楽界に希望を持たずに、卒業したらやめちゃうみたいな、どんどん増えていくかと思うと恐怖でしかなくて。もったいない、もったいないと」（30代女性）
「せっかく音楽大学入ったけど『そんなに先生みたいにやれないです。どうしたらいいですか』みたいな話を、結構受けてて。でも、こういう行動を私はしていったよっていう話をすると、みんな目が輝き出すんですよ、面白いぐらいに。『そんな話、聞けることなかった。ちゃんと先生も苦労したんですね』」（30代女性）
「出口戦略が持てるようなロールモデルとか、音楽をやってきたことをちゃんと自分で意味化できる。3年間くらい、土日だけフリーランスして、違う職業に就いても、例えば制作学んでも、受付業務やっても、何でもいいじゃないですか。ベビーシッターやって、実は音楽やってるんです、週末コンサートあるから来てくださいって言って、それがどのぐらい大変なことなのかとか、お給料頂くってどういうことかっていうこととかを、ちょっとやってみるといいのになって」（40代女性）

２）音楽大学の現状

現在、全国的に音楽大学志望者の減少と、定員の充足率が不足しつつあるという問題が起こっている。愛知県内の音楽大学も例外ではない。その中で学生の傾向も変わりつつある。上位の優秀な層とそれ以外の層との二極化が進んでいる。

「二極化していて、上位10％の優秀な学生と下が分厚い。公立だとこの幅がもうちょっと狭い。下のレベルがかなり下がってきてますね。私立大学では劇的に変わっていて、演奏家コースというのを設立して、ある程度狙いを定めて世界トップの学生を引っ張ってくるので、世界レベルで活躍してるのがいる。彼らが広告塔になってくれて大学の知名度を上げている」（50代男性）
「上の子たちはとても優秀で、院だけ東京に行ったりとか、桐朋のオーケストラ・アカデミーに行ったりとかっていって、またその先のつながりを見つけていったり、留学したりっていう子たちもいっぱいいます。もちろんそのまま留学先で愛知県芸大の人なんかも、オーケストラか、海外で活躍されてる方も結構いらっしゃるし。でも、どのぐらい、入った人の何％が音楽メインで残ってるのかっていうのは、もしかしたら昔よりも減っちゃってるのかなっていう感じはしますね。なので、一般企業にっていうふうに最初から思ってる方も結構いる」（40代女性）
「学生でもいいから連れてきてとかいう時あるじゃないですか。でも連れてったら、アマチュアの人のほうが上手だったみたいなことも起こり得る状況」（40代女性）

一方、社会環境の変化につれて、音楽家としてのスタイル、表現活動の方法や媒体の変化も表れている。とくに電子機器やITシステム、SNSの活用などは積極的に行われている。

「今の学部の1、2年生だと小学校ぐらいからタブレット、スマホとか触ってたりする世代なので、そうすると理論知らなくても作っちゃってる。例えばユーチューバーでも10万回再生とか、場合によっては100万回再生ぐらいいってるのがいるんですよ、学生で。そういう学生は別の才能があってそっちのほうに伸びていってプロダクションに入っていってやってるというのは卒業生では何人もいます」（50代男性）

３）社会の中の音楽家として生きていくために

今回のインタビュー対象者は音楽大学を卒業し、音楽家として活動しはじめてから数年以上はたっており、自身の表現活動にとどまらない社会との関わりを持つ中で、音楽家として、さらに一人の人間として社会の中でどのような役割を果たしていくかということを自問自答する声も聞かれた。

「いわゆる音楽大学出て、オケ入って、ちょこちょこレッスンしてみたいなだけの活動で人生を終えてしまうと、本当にそれだけで終わってしまうというか。それこそ、音楽やってすごいね、といわれる存在でしかなくなるっていうのがすごく、個人的には嫌で。ちゃんと世間とつながることをしていたいってうのがある。でも本当にそういうことをちゃんと考えるようになったのは、ここ数年。音楽家である前に、ちゃんと一人の人間であるっていうことが、割と自分のテーマになって。それがちゃんと還元できるような場を常に探したいという感じではあります」（30代女性）
「ただ楽器が上手になるっていうことが目的ではなくて、音楽に触れた、芸術に触れたっていうことが人々にどのように作用するかっていうことも考え出して。そういうこともあって、例えば、まちづくりの分野とかですと、そういう音楽がある場づくりをすることによって、どういうような反応が町に生まれていくかっていうことなんかを考えている。日常とかインフラみたいな、そこに根付く形だったりとか。ほんとは必要って自分の口では言ってなかったのに、その場に行ったら必要って気付いたみたいなことを作れるような役割のほうが、自分が演奏してお届けするより向いてるかなっていうような」（40代女性）

アウトリーチや他分野との連携にも関心は高いが、アーティストが調整まで行うのはハードルが高い。そこには、演奏家以外のプロデューサー的な専門人材の必要性や、社会連携の仕組みの存在が求められる。

「0歳から入れるコンサートとかで。しかもそれも、産後のお母さんたちが演奏家でっていう形で、女性が輝いてる状態をみんなで見るみたいな。お子さんも見るし、今、出産したばっかりで、自分は社会とつながりがあんまりないけれども、そうやってまた人前に立ってる人たちを見て、また自分もやる気になるみたいな、そういう仕組みが作れないかなと思って、そういうこともやったら、想定外にいろんな人が来ていただいたりとか」（40代女性）
「向こうは向こうで忙しくてたぶん手いっぱいだから、福祉も教育も。面倒くさいとは思うんですけど。でもそちらにそういうお気持ちがある方がいたら、どっかのちっちゃい区だけで始めてもいいし。そういうふうにできるといいのかな」（40代女性）
「アウトリーチとかそういうところで地元のアーティストが今、活躍、活動の場があるかっていうと、そこも何となく弱い気がしてます。（名古屋圏にプロデューサー不在でできないのは）社会連携のほうなんかは、でも、特にそうだと思いますね。発想を演奏者自身の中に求めるっていうことは難しいかもしれない」（40代男性）
「例えば、春日井市では若手音楽家支援事業というのがあって、これは地元に縁のあるアーティスト、春日井を中心に活動してる人で地域に住んでる方々にアウトリーチに行ってもらうためにいろいろ企画をつくって一緒にやっている」（40代男性）

５　芸術活動の場としての名古屋

１）名古屋を活動拠点とする理由

今回の対象者は名古屋圏在住かつ当地域の音楽大学出身者が大半であるが、彼らの名古屋圏で活動している理由は、主に人的ネットワークなどの生活基盤が存在しているという理由によるものが多い。一部で東京への憧れを持つ者も多いが、名古屋圏での安定した活動に満足感をいだいている面も見受けられる。

「本当にもう名古屋が大好き過ぎて、ずっと名古屋で活動してるんですけど、それこそ東京でやってみないかとかって言われることも結構多いんですけど、全然ピンとこないんですよね。私は名古屋で本当によくさせてもらってるんで」（30 代女性）
「仕事のご縁が自分が手の届く範囲でつながるのが名古屋しかなかったっていうのが正直なところ」（30 代女性）
「やっぱり東京行かなかったからとか、そういう劣等感はすごいあったんですけど。今は『名古屋で●●さん知らない人、ああいないよ』みたいになったら別にいいなっていうふうに。今はもうこの地でじゃあ築いていければいいのかなと思いながら」（40 代女性）

名古屋圏と首都圏、あるいは関西と拠点をまたいで活動する者も多い。首都圏の音楽大学出身者の活動も増加している。名古屋圏出身であることで名古屋圏を拠点としながら他地

域でも活動できることはメリットである。

「優秀な方々がどんどん増えてきたっていうこともあるけれども、東京だけでは活動の場が足りない。ダブル拠点で、名古屋と東京って結構近いので。あと、こっちに軸を置いて活動したいっていう、地元愛の強い人も結構増えてる。20 何年前には、例えば名フィルとかも地元出身の方がいらっしゃるっていうとか。管楽器とかになると全国区だと思うんですけど、弦とかだとあんまりいない。ピアノもそうですね。名古屋から出たら出っ放しっていうのが、基本だったっていう感じがするんですけど、今はもう全然で。東京藝大とか行っても、実家名古屋だからって戻ってくる人、とても多いです」（40 代女性）
「主としてこっちに拠点を置きながら音楽活動をやってる人もいますね。エキストラで東京行ったり、大阪行ったり。そういう意味で名古屋は動きやすいっていうところはあるんじゃないかな」（50 代女性）
「東京出身で、ずっと関東にいるっていう人は、地元がないっていうことにコンプレックス持っている方も多いので、『そうやって地元で仕事できるのっていいね』っていうのは、言ってもらえる。自分が名古屋のオーケストラに入ったのは、そこの顧問の方が『名古屋出身でしょ』って言ってくださって。結果的に、東京と名古屋を拠点にするようになったっていう感じなので。それを最初からイメージしてたわけでは全然ないですね。住むのは東京で、必要だったら名古屋で仕事してっていうのが、今のところ、はまっている」（30 代女性）

一方、首都圏の大学出身でも大学教員は別の地域から移住してきたというケースはあり、音楽大学が優秀な人材流入の受け皿になっていることがうかがえる。

「愛知に来て失ったものほとんどない。得たものしかない。デビューの地が愛知だってこともあったし、それなりに知ってたから。すごいゆかりがあるってわけではないけども、でも抵抗がないというか、自分がいる場で自分が盛り上がればいいでしょって思ってたから」（40 代男性）
「名古屋近隣地域の出身ですが、名古屋に定住するつもりは 0%でした。しかし、大学で教鞭を取るということで、名古屋での音楽活動の主役となるという判断がありましたし、昔お世話になった先生方とか知り合いとか含めて、いろんな自分のキャリアを積むということは想像できた。1 回日本で教えてみたいという好奇心もあったりとか、経済的な関係とか、オファーをもらった時にはそこまでちゅうちょなく名古屋に来た」（50 代男性）

２）名古屋の音楽家のステイタス

演奏活動をつづけながら安定的に生計を立てるという面では、名古屋圏ではまずオーケストラに所属するか、大学で教職に就くかが、成功パターンであると認識されている。

「私のイメージでは、名古屋出身で、東京に出ず、名古屋で活動されてる人は、まずは名フィルにオケマンとしては憧れるというか。私もそうだったんですけど。やっぱり名フィル入るっていうと、名古屋の人、あんまり音楽知らない人でも知ってる。一番大きな就職先っていうことはありますね」(30代女性)
「オーケストラとか、ほんとに1ポストに100人とか殺到するのが現実で。そうすると、ここが地元だからとかっていうこと関係なく、いろんな人が受けに来て。名古屋は都会のほうですしね。だから、そういう厳しき門なので」(40代女性)
「教員であるとか、オーケストラであるとか、逆に言うと、それ以外の成功パターンっていうのがあまりにも少ない。名古屋で音楽だけでやれてる人っていうのは必ず何かどっかに軸足があって、それプラスアルファでやってるっていうことがほとんどなので。名古屋でやれなくなってくると、関西なり東京なりに出てくっていう」(40 代男性)

一方、音楽大学を経ず、あるいは関連のないポピュラー音楽などの分野で名古屋圏にいながら全国区になる事例も最近見られる。クラシック音楽分野の Youtuber も出現している。

「最近例外があって、音大なんか出なくても、沢田蒼梧君みたいな人もいるわけですね。もう自分から話題を SNS での発信でつくっていくみたいな。ああいう人っていうのもやっぱり一定数いて、クラシック以外の人のほうがそういうこと強いんじゃないですかね。ジャズ畑で名古屋から出てて、しっかりそれで生活できてますよみたいな人、多いと思いますし」(40 代男性)
「呂布カルマを参考にするといいのではと思ってる。名古屋のヒップホップシーンみたいなのも割と参考にできるのではって思ったりします。音大の人たちにない、野生の力、しぶとさみたいな。呂布カルマだって名芸出身ですよ、美術科ですけど。漫画家を目指してて、ラップとかは趣味でちょっとやってたら、途中で向いてるってことに気付いて。いろいろなとこでライブやってたら、どんどん有名になってたみたいなことらしいので」(40 代男性)
「最近は、演奏家の人たちで YouTuber とかも出てきつつありますよ、県芸出身の。ピアノとかクラリネット、フルートとかにもいたはず。結構、多分、収益になってるだろうなっていうぐらいの人たち」(40 代男性)

３）音楽大学とオーケストラの存在、音楽業界のネットワーク

ここまでの対象者の語りの中でも、名古屋圏において、音楽大学が3大学、プロのオーケストラが4団体あることが、音楽家志望の学生の他地域からの流入、人材育成、卒業後

の定住やプロの音楽家の流入の大きな要因になっているほか、当地域の音楽業界のレベル保持に貢献していることが見て取れた。

「(名フィルは）とてつもないレベルが上がっていて、めちゃくちゃ上手い若い世代の人が入っていて、プログラムもものすごい凝っているし、頑張っているなと思います。が、来ない人たちに対するアプローチや、プロモーションイメージ作りがすごく弱い。練習用の代役として当時無名の川瀬さんを呼んできて、そこから川瀬さんのプロとしてのキャリアは実質開けていったそうで、でもやっぱり川瀬さんは神奈川フィルの指揮者だというイメージを持っていかれちゃっている」(40代男性)
「音楽大学がこの地域には3つあるって言われていて、愛知県立芸術大学と名古屋芸術大学と名古屋音楽大学、特に名古屋音大とか名古屋芸大とかは、いわゆるクラシックの方は想定してますが、もう少しエンタメ系の方に行くような人にニーズを当てて育てているというのが多いです。例えばディズニーのキャストになるような人向けとか、劇団四季に入りたいというような人とか、そういうような人も育てているという感じ。県芸はそういうのやってなくて、比較的昔ながらのって感じ」(50代女性)
「(大学で)若い先生と、学生ほとんどが、うちの場合は結構作曲なんかだと留学生もいたりするので30歳前後の学生もいるんですけども、一般的に若いので、若者からもらえるエネルギーっていうか、同僚がかなりその業界で活躍してる人たちも多いので、例えば私なんか楽器のこと聞きたいとかっていうと、すぐに連絡したり、次の日には教えてもらえるとか、作ってもらえるとか、そういった環境があったので、人脈が一気に広がる」(50代男性)

また、名古屋圏は地方の中では比較的音楽業界の規模が大きくマーケットもあるので、地域外からの人材を受け入れる土壌もある。

「地方であればあるほど、東京の音大受かったのでと地元のお世話になった方とかにあいさつに行くと、『もう帰ってこないでね』って言われるらしいんですよ。閉鎖的な地方だと、優秀な若い人が戻ってきてしまうと、自分の生徒取られちゃうとか。それと比べると、歓迎してくださる所もたくさんあるので、ありがたいなというのはあるんです」(30代女性)

一方、音楽家人口が集中する首都圏と比較すると、名古屋圏の中で培われていく人的ネットワークについては良い意味では仲間意識が強く、課題としては広がりに欠け切磋琢磨する機会が不足する。

「名古屋だと、良く言えばすごく仲間意識が強い。長年一緒に仕事したりとかっていう雰

囲気。東京にいる時のほうが、みんなが次誰と仕事しようって、すごく目を光らせている印象が強い気がします。鋭い観察眼みたいなので、常に自分が評価されているっていうのがあるので、いろいろな出会いが起こりやすいっていうのはあるかもしれません。正直に自分の評価が世に出るという感じです」（30代女性）
「（名古屋圏での競争原理は）働いてる、そうですね。でも、構築されてるのかなっていうところは、はてなで。誰でもですけど、慣れた人とかが良かったりするから。もっと上を知らないでずっと同じ人に頼んでるとか、そういうことも」（40代女性）
「名古屋の音大出身の方々で固まりますよね。それも同じ世代の先輩後輩の、大体同じぐらいの年代の人で固まっていつもそうやって演奏するっていう状態で、世代を超えた交流もなければ、東京や関西の人たちと一緒に何かやるってこともあんまりないところが、ちょっと単調っていうか、同じだけの技量を持っていても幅の広さになっていかないっていうか」（40代男性）

また首都圏と比べて演奏会の数が少ないということ以上に、自身の先生や大学の同窓生など周囲の音楽家以外の演奏会に触れる機会がなく、聴きに行くという習慣も薄いので、同世代の演奏を聴いて、人脈形成や自身の糧にするという志向をもっと持つべきだという指摘もあった。

「（東京では）人のコンサートを聞きに行ったり、その後の時間に他の人としゃべったりだとか、そこでちょっと知り合いとかがいたら、それが誰かに紹介してくれたりだとか、それも大事だと思います。人の何か見に行く。友達のところのライブとかで知り合うだとか」（40代男性）
「学生たちも場数がない上に、人の演奏を聴きに行くことの数も絶対的に少ない。彼らは何を聴いてるかっていうと、先生や先輩や同級生っていうか、周りのそういう関係者の演奏しか聴いてない。名古屋と東京の音大で合同演奏する機会があると、全然違って、すごくお互いに新鮮っていうか。そこで立ち居振る舞いとかステージであるとか、そういうことも『ああ、全然教えられてこなかったな』みたいなことを、名古屋の子たちは痛感する。将来、同じ世代の人たちと自分が例えば東京に行って共演するかもしれない、その人の演奏とかって思えると、全然自分ごとになると思うんですけど、そういう視野の広さはないですよね」（40代男性）

４）芸術活動の場としての環境

マネジメントに関する課題でもあげられていたように、音楽活動をする上では集客の問題がいつもつきまとう。海外オケ演奏家や全国区からの公演には高いチケット代を出す名古屋圏の観客層が、地元の音楽家や団体に関心が薄いという傾向についての言及も見られ

た。

「派手なものを持ってきてやってそれを消費するっていうことに慣れてる。今となってはと思いますけど、海外のオケを聴きに行く人たちは『名フィルなんて三流でしょう』みたいな。でもその人たちが名古屋のクラシックファンの中核だった時代っていうのがあったのは確かで、地域のアーティストにあまり目を向けない」（40代男性）
「名古屋の人はブランドに弱いし、日本人多分みんな弱いんじゃないかなと思ったりしていて、そこら辺が東京はうまいなと思ったりします。六本木アートナイトとかも何かよくわからないけれども、とにかく面白そうだみたいなのができちゃっていたりする」（50代女性）

習い事が盛んな土地であるために、自分で習ったり演奏したりする層が多いにもかかわらず、コンサートのオーディエンスになっていかないという傾向もある。

「アマチュアオーケストラの人たちとか、演奏は好き。バレエ団もそうですよね。踊るのは好きだけど、見に行くのは行かないとかいう人とかも多い。自分がやるのは好きだけど、そこがなんでそうなっちゃうんだろうなっていうのは、私もちょっと不思議です。鑑賞っていうもの自体が捉え方が違うのかなっていうのはありますね」（40代女性）

一方、名古屋圏出身の演奏家人口も増加したことで、現在では名古屋圏出身ということがアピールポイントになり得るという意見も聞かれた。

「前よりも名古屋出身だっていうことをうたえるようになったっていう気はしますよ、若手のアーティストなんか特に。そういう人は『この人、名古屋の出身なんだ』っていうことが、名古屋のクラシックファンが応援する一つの理由づけになり得てきているという気はする」（40代男性）

オーディエンスが育たないことの要因として、雑誌の減少、新聞社ではレビュー欄の減少や消滅、評論家の減少により、地元の公演の評論もどんどん少なくなり、名古屋圏における音楽活動の評価がなされていないという問題も深刻である。

「新聞とか雑誌とかの地方での批評を書くような欄とかもすごい減っちゃったので、そもそもそういう仕事をする人があまりいなくなってる」（50代女性）
「評論は今、名古屋では機能してない。『音楽の友』の後ろのほうに評論の各地方の演奏会がありますが、もう何年も前から名古屋は飛んでますよね。自分が行きたくて行けなかったけれども、どういう様子だったのかなっていうのを知るのはもうSNSになって、一般

の人が発信したもの」（40代男性）
「名古屋音楽ペンクラブを作ったのは藤井知昭先生でしたが、藤井先生ほどの評論家は名古屋にはその後なかなかいない。新聞の全国紙もほとんど壊滅状態で地元の文化をウォッチできるというような状態ではないと思っています」（40代男性）

また、ハード面では市内のホール不足は相次ぐホールの閉館も相まって課題であり、ソフト面ではコンサートなど発表の場が多様性に欠けるという意見もある。しかし、そのような名古屋圏の状況も日本全般に言えることだという指摘もある。

「しらかわホールがなくなっちゃったので、あのぐらいの箱っていうのがないのはすごく残念で。しらかわホールのオープニングの時に名古屋音大のガムラングループがコンサートをして、ライヒに委嘱して『Nagoya Marimbas』書いてもらったんですけど、名古屋って名前が付いてる曲ができて世界中で知られてる。世界のマリンバの人なんかは『Nagoya Marimbas』の名古屋ね、みたいに言う人もいたりして、もっと知られてもいいかなっていう気はするんですけど、もったいないなって」（50代女性）
「海外で学んできたことを、発揮する場所がない。教えることももちろんできないし、発表っていうか演奏したとて、やっぱ現代音楽とか、聞きなじみのないものに関してはなかなか寛容性がないので、帰ってこれないから向こうにとどまっているってのがあって、すごいもったいないっていうのがあって、そういった人たちを、何か呼び戻せる場所にしたい」（40代女性）
「名古屋はやっぱり保守的というか、活動しやすいかしにくいかというと、しやすくはないかな。そう言ってしまうと、日本自体が活動しやすくない。東京のほうが人も多い分、ホールに行ったりもするので、多いような気がするんですけども、名古屋よりは。じゃあ極端に変わるのかというと、そこまで変わらないというか、やっぱり公的助成金とか何かの問題とか、そもそもコンサートのオーガナイズの仕方が日本はヨーロッパと根底から違うので」（50代男性）

一方、個人のサロンが増加し、そこで若手アーティストが演奏活動を行っているなどの独自の潮流も見られる。

「今、名古屋ってすごく全国的に見ても面白いなと思うんですけど、個人が自宅にホームコンサートとかできるような小さなサロンを持つということが、ここ数年で増えていて、そういうところで若いアーティストで、今まであんまり表に出てこないような人たちが『あれ、こんな人がいたのか』みたいなのが結構見かけるようになってる。そういうところでちょっとずつ、規模は大きくないけれども深く応援してくれるようなファンを獲得して活動を続けていけるようになりつつあるのかな」（40代男性）

５）名古屋に対する期待と課題

名古屋市や愛知県などの公的支援、あるいは公的施設に望むことについては、助成などの資金的な支援の充実、助成にまつわる諸条件、東海圏規模での人材育成を視野にいれた他領域にまたがるプロジェクト、アーティスト・イン・レジデンスの実施、地域のアーティストと文化施設との連携などがあげられた。

「自主企画でリサイタルをしようと思うと、経済的な負担の面でホールが安く借りれるとすごくありがたい。あとは練習場所です。打楽器特有かもしれませんけれども、やっぱり自宅でなかなかできなくて」（50代女性）
「日本の特に現代音楽のコンサートの70％から80％ぐらいおそらくポケットマネーでもってるんじゃないかな。作曲家はコンサートやればやるほど赤字になる。ヨーロッパの場合は出ないというのはないです。100ユーロでもポケットマネーを使わないっていうのは、使いたくないっていうことではなく、そうさせてない」（50代男性）
「日本じゃあんまりない制度ですが、レジデンスはつくってほしい」（50代男性）
「助成が入るもののほうが先進的なプログラムにトライしやすい。助成の条件として1つの演目だけでも、チャレンジングなものを期待するみたいなことを書いてくださると」（40代女性）
「助成でアーティストへの負担がすごい大きい。作品を作るだけじゃなくて、それ以外のことをすごい課すんです。街とどうつながるかとかもそうだし、シビックプライドをどう育てるかってアーティストに開拓させる。金銭的にそんなに多くないので自分で補填したり他の助成金もらったりとかしたり、その割にやることがすごく多い」（40代女性）
「3つの音楽大学があるからそれを誰でも参加できるようにすると、交流が生まれるからもっと面白いのになって思うので、愛知芸術文化センターでやってほしいと話しているんですけど」（40代女性）
「例えばペインターと会ったり、演奏家と会ったり、ダンサーと会ったり、そういうようなアーティストのコラボレーション。名古屋っていうことだと毎回東京から来たとかって多いんですね。なので地元出身だったり、愛知、岐阜、三重、静岡など、この辺出身の人とか、ここに拠点を何らかの形で持ってる人たちがいろんな活動ができるようなチャンスというのがもっとあるといい。外部から呼んでくるんじゃなくて、この中である程度完結できるような人材育成というのをお願いできたら」（50代男性）
「（公的施設が自治体内の）プレイヤーの人たちとどうやってつながっていくかということをあまり考えていない。基本的に貸館だというイメージが、多くの人たちにこびりついている。名古屋市文化振興事業団は子ども向けとかに特化してやっている印象で、市民密着みたいな会場提供も含めて、それはそれで意義のあることだと思っていますが」（40代男性）

また名古屋の目指すべき姿についての意見も聞かれた。

「ミナス派っていうブラジルの音楽の潮流がある。そこのミュージシャンたちが、結構面白い音楽を作ってちょっと話題なんです。ミナスとかも別にリオを経由してどうこうとかっていうんでなくて、もうそこから世界に飛び立てちゃったわけだから、名古屋ももう東京とか経由しないで名古屋派みたいな感じで。ていうふうに世界から見られたら面白い」（40代男性）